猫蓑通信

第126号

令和7年
（2025年）
2月15日発行
（年3回発行）

あの千恵子ちゃんが

鈴木千恵子

初懐紙を三か月後に控えた十月のある日、武井雅子さんが贈り物を下さった。一つは、明雅先生のご自室の入口に掛かっていた八角形の手のひらサイズの木札。篆書で黒々と「猫蓑庵」とある。ご自身でお弁当の蓋に揮毫された遊び心のあるもので、立机襲号が決まってからお宅を訪れたときに、厚かましくもおねだりをしていた。もう一つは（昭和六十二年）七月十七日の日付の、わたしを連句に導いてくださった大学の先輩の二村文人さんから、明雅先生への手紙である。文末にこうある。

尚、二十日ですが、都立大を出て都立高島高校の教員をしている鈴木千恵子という後輩を御一緒させていただきたいと思っております。「一代女」を勉強している女性です。どうぞよろしくお願い致します。

現在の柏連句会は第二日曜だが、当時は第三日曜で二十日はその日だったのだ。わたしはまだ自分が高校生のような、浅学の身であった。当日のノートに、

月影に何を語るや辻地蔵　　千恵子

という初めて取っていただいた句が記されている。これがすべての始まりだった、と深い感慨に耽った。今回の話をお聞きになったら、先生は、「ほー、あの千恵子ちゃんがねえ」と驚かれるだろう。二村さんもきっと、悪戯っぽい目をして、「やー、千恵子さんがねえ」とおっしゃるだろう。

知らなかった世界は、新鮮で魅力的なことばかりで、すぐ連句に夢中になった。その魅力は何といっても、世界でも稀な集団で創作する文芸という点にある。他人の句に触発されて、思いがけない自分を発見する。自分の句に他人が予想外の展開を見せてくれる。高校の教員と、文学を「研究」する人との人間関係が中心だったわたしは、いろいろな人生を歩んできた方と知り合うことができた。連句の大会をきっかけに井波、新庄、松山などいろいろな土地とのご縁もできた。先生と最上川の船下りをしたことなどが思い出される。当たり前のように、お会いできる日はずっと続くように思っていたが、お別れの日はやってきた。居酒屋で焼鳥にとんがらしを山とかけていらした姿が懐かしかった。

唐辛子暮れてかなしき赤の色　　千恵子

その秋は、正式俳諧の配硯の役を初めて仰せつかり、先生の重ね硯をお預かりしていた。

時雨るるや重ね硯の蓋きしむ　　千恵子

そして、追悼集『安曇野は昏れて紫』掲載の拙文のとおり、「年が少なめということで、さらに若い者に連句を伝えていく機会が多いとすれば、先生の教えを伝え続けていきたい」と考えるようになった。素晴らしい連句を知らない人がいるなんて、なんともったいないことなのだろうと。人との出会いは人を作るけれども、人との別れも人を作る。その日から分からないことがあったら、二村さんに疑問を投げかけ、「千恵子さんは連句のパートナーだね」と言っていただくくらいに、連句に情熱は注いできたと自負している。そして、二村さんともあまりに早い突然の別れを経験した。

蜜豆食ふ俳諧の兄逝きし夜　　千恵子

読みさしの本開く白服　　美友紀

●目次●

▼あの千恵子ちゃんが　鈴木千恵子　1
▼左沢文台のこと　五十嵐譲介　3
▼蒼虬文台のこと　奥野美友紀　3
◎第百六十八回例会（猫蓑会総会）作品 歌仙五巻　4
◎芭蕉忌正式俳諧　6
◎芭蕉忌・明雅忌作品　源心六巻　7
◎第39回国民文化祭連句の祭典受賞作品二巻　10
岐阜市長賞 短歌行「檸檬食む」石川 葵捌
岐阜市市議会議長賞 短歌行「陽を弾く」高塚 霞捌　石川 葵　11
▼【留書】連句徒然　12
●事務局だより

それからは兄の分まで、連句を大切にしていこうと思ってきた。「連句」ということを繰り返し書いてきたが、わたしの目指すところは強いていえば、俳諧師なのだろう（先生は「俳諧師」という名刺をお持ちだった）。伊勢流の俳諧の伝統を学んだ上で、現代連句の実作に生かすという立場だ。令和三年十二月、日本連句協会会報に「俳諧師の条件」という小稿を草したことがある。よりよく連句をするために必要な条件を1実作力、2座持の力、3知力、4人間力、5酒席の振舞としてみた。これは自分がかくありたいという目標である。

＊

明雅先生は、現代連句の隆盛のためには捌き手の育成が急務だと考え、また理想念願を理解して力になる宗匠を作りたいと願われていた。歴代の宗匠については『猫蓑通信』前号に掲載されている。平成十六年以来、猫蓑会としての立机の式は見送られてきたが、令和六年になってわたしも立机のお話をいただいた。力不足で務まるのか不安だったけれども、現宗匠のお薦めも理事会の後押しもあり、お受けすることとした。さらに猫蓑庵を襲号する運びとなった。「猫蓑庵」は先生のお好きだった相撲に喩えるのならば一代年寄のような名跡で、初めはあまりに畏れ多いと考えた。しかし、猫蓑会がよりよい会であるために、二世襲号もお受けしようと覚悟した次第である。よりよい会というのは、先生の目指された世態人情諷交詩の精神を、互いに尊重しながら追求していける会ということである。この機会に「世態人情諷交詩」論を読み返した（『猫蓑通信』第28号46号47号）。世態人情は、花鳥諷詠に限らないものとして提言されていることがわかる。そして写生だけに留まらず、虚実の間に「あはれ」と「をかし」を見出すことの大切さが説かれている。わたしたちが受け継ぐべきは猫蓑会の式目ではなく、理想とする連句のために何を大切にするかという精神なのである。もちろん、二世として、会員以外の連句を愛好する方々ともゆるやかに繋がっていきたいと考えている。

三月には、委員会が発足し、林転石委員長、武井雅子委員、佐々木有子委員が立机の準備を進めてくださることとなった。後に、佐藤徹心理事も会計として補佐に。転石理事の担当だった百韻の付廻しは、多大なるご尽力により満尾した。田中秀夫理事が、作品チェックの担当であった（千惠子自身も確認）。付句は国内は鹿児島から、国外ではベルギーまでの地から届いた。付けてくださったご連衆も百一歳から、九歳までの幅広い年齢層に及んでいる。これも猫蓑会の地道な活動へのご理解のお陰と、感謝を申し上げる。立机文集の「紅梅一枝」は、平林香織理事が編集してくださった。鈴木了斎理事が補佐である。「ことし竹」「松五本」という二冊の立机文集に続き、かつての松本の東宅にあった美しい大きな紅梅に因んだタイトルをつけていただき、とても光栄に思っている。文集の割付は、鈴木英雄さんのお世話になった。

また猫蓑会としての歴代の宗匠の立机式では、新しい文台の授与が行われていた。今回は二つの文台を譲り受けることとなった。一台は五十嵐譲介さんのお作りになった左沢（あてらさわ）文台である。もう一台は二村文人さんの許にあった成田蒼虬（そうきゅう）由来のもの。それぞれの文台について、譲介さんと奥野美友紀さんが文章を寄せてくださった（本号3ページ参照）。

理事の皆さんが中心になって立机襲号が実現したわけだが、そこでの合言葉は「一致団結」ならぬ「立机団結」だった。その他たくさんの方からも、お祝いと励ましのお言葉をいただいた。

＊

こうして会として途絶えていた宗匠立机と庵号が復活した。しかし、当然一人では会を背負っていくことはできない。今後も、皆さんと共に連句を愛していきたい。思いは、前会長の青木秀樹さんを追悼したときと同じである。

託さるる風雅のバトン初御空　　千惠子

そして近いうちに、猫蓑会を中心となって共に牽引していく新宗匠が、さらに誕生することを願う。

明雅先生自筆「猫蓑庵」

左沢文台

左沢（あてらざわ）文台のこと
五十嵐譲介

私が東先生の需めに応じて文台を作ったのは、昭和六十一年の秋だったと思います。私は、この二年前からやっと探し当てた吉祥寺の木工教室に通い、木工の基礎を教わり、一年間でサイドテーブルと椅子を作りました。その後教室を辞め、自力で小箪笥を作りました。この経験は大変楽しく嬉しかったので、先生にお話しました。当時先生は、いずれ弟子の立机に備えて文台の必要性を感じていたのでしょう。それで私の木工修業の話を聞いて、小箪笥を作ったというなら文台も作れるだろうと私に依頼したのだと思っています。この時、私には正直文台を作る技術はなかったと思います。でも、初めての注文であり、それも東先生からの依頼なので、嬉しく頑張ってみようとお受けしました。

材料の桐は木場で求めました。当時木工機械はなく、手道具の鋸・鉋・鑿だけです。一番難しかったのは、天板の鏡板と足の側板との仕口です。鏡板の反りを防ぐため蟻桟吸付き加工にしました。鏡板の裏に足の側板を嵌める台形の蟻形の溝を彫ります。これには畔挽鋸（あぜひきのこ）と鏝鑿（こてのみ）を使って慎重に加工します。側板の小端にもオスの蟻形を加工し嵌めこむのですが、緩くてはだめです。三分の二ほど手で押し込んで、最後は木槌で叩いて入れます。初めての作業でしたが何とか頑張って仕上げました。

蟻桟吸付き加工

この文台は、昭和六十二年四月二十五日の「亀戸天神奉納正式俳諧興行」で初めて使用されました。その時の二十韻興行の花の句は、先生の「新しき文臺花に使ひ初め」でした。又、『季刊連句』第17号の「雁帛往来」で、「使用した文台は……玄人はだしの素晴らしい出来であり……私も大変気に入ったので、五十嵐氏の出身地山形県左沢の名に因んで『左沢文台』と名付け愛蔵している」と記していただきました。

因みに文台製作後の私は、地元の井戸掘り技術「上総掘り」・学生と五年かけての茶室建築・茶釜を作るための「たたら製鉄」・三回目で成功した「玉鋼」での日本刀（脇差）作りと、物づくりの難しさと面白さにのめり込んでいきました。この日本刀を先生にお見せした時、「ホー譲介君は道をあやまったんじゃないかね」とおっしゃった声が今でも鮮明に耳朶に残っています。

この度、千惠子さんの猫蓑庵二世立机に際し、「左沢文台」を引き継いでくださると聞き、本当にうれしく有難く思っております。

千惠子宗匠、おめでとうございます。

蒼虬（そうきゅう）文台のこと
奥野美友紀

「蒼虬の文台があるから、二村さんにあげます」と大西さんはおっしゃっていた。「蒼虬」は、猫蓑会の先達・成田蒼虬（宝暦十一年一七六一～天保十三年一八四二）、「二村さん」は、二村文人さん、「大西さん」は、昨年亡くなった富山短期大学名誉教授・俳諧研究者の大西紀夫さんである。しかし二村さんのもとにいつ文台が行ったのか、実は覚えがない。ごく軽いやりとりであったのではないかとも思う。

平成二十六年、二村さんが急逝され、夫人の智惠子さんから、文台をもらってくれませんか、と連絡があった。私が持っていていいのか、と思いつつ、木箱を預かった。

「出立」が決まり、久しぶりに箱を出すと、板はぱっかり分かれ、箱としての体をなさなかった。文台は無事。千惠子さんは箱にはこだわらないとおっしゃったが、預かったからには支度したいと思った。蒼虬の故郷の指物師に頼みたい。しかしいま金沢に本職はいないという。

そのころ、一級建築士で、金沢の町家修復にも関わる下坂裕美さんを知る機会があった。漆職人の定池（さだいけ）隆志さんをご紹介いただいた。木工も手掛ける方である。経年変化は味わいとして残してよく、無理でない範囲で整えていただけたらありがたいとお伝えし、どの程度「直す」かということも含めて、お任せした。

杉の箱には「二見形文台」と墨書するが、桐の文台に二見（浦）の絵や語句はない。表には何もかかれず、筆が転がり落ちないよう両端に細工（筆返し）を施す。

（※以下、P.10下段に続く）

第百六十八回例会
猫蓑会総会作品　歌仙五巻　1～4

清水の座

歌仙「大瀑布」　鈴木千惠子　捌

地図上の点の著けく大瀑布　千惠子
　薄雪草を探す脇道　桜千子
念願の煉瓦造りに引越して　をんみ
　ファンタジックなランプ軒先　転石
弓張の月によりそふ星ひとつ　あき子
　肩いからせて南瓜切り分け　桜
ウ　秋場所の力士乗り込む地下鉄に　あ
　彼のピアノで歌ふシャンソン　同
可愛くて吐かれてみたい君の嘘　桜
　被告は前へ黙秘権あり　石
天秤で量る薬草十グラム　桜
　魔女の館に月の冴え冴え　み
外套を脱ぎ脱輪に手を貸して　桜
　珈琲好きが豆の蘊蓄　あ
ブラジルのサンバのリズムで階昇る　み
　ジグソーパズル一面の空　桜
酔ひ痴れてみな仰向けの花の宴　石
　春の夢から覚めてため息　み
ナオ　風にふれ風に遊んで青き踏む　あ
　熱気球いま陸を離れる　石
境内の飼ひ猫となる野良のミケ　あ
　生命線は強くくつきり　桜
親と子の足型似てる三尺寝　あ
なまの卵と茹でた卵と　石
イケメンの先輩わたしだけのシェフ　み
　京都出張浮気疑ふ　同
本願寺悪人こそが救はれる　石
　連番のくじ当たる幸運　同
月光の垂れ幕に書く祝優勝　桜
　武者修行した木の実降る山　み
ナウ　ドローンは電波さやけき境まで　石
　事の顛末いつも日記に　あ
今生は色即是空遊びきる　桜
　水琴窟の軽やかな音　あ
ディープスリー吸ひ込まれゆく花の中　千
　双眼鏡に巣立鳥追ふ　あ

連衆　鵜飼桜千子　福澤をんみ　林　転石
　岩崎あき子

噴井の座

歌仙「炎暑にも」　荒木　鑑　捌

炎暑にも雑草伸びる力かな　鑑
　競ふ如くに蝉の鳴きをり　有子
ひらめきを帳簿の隅に書き留めて　肇
　無心に削る鉛筆の芯　香織
円き月マンション群を包むかに　惠子
　畑の案山子と睨み合ふ子ら　鑑
ウ　あこがれの人と初めて大文字　有
　牛車の内に関白を待ち　肇
妹と姉取り違へ知らん顔　織
　ことさら旨き明けのコーヒー　惠
井戸端の話題はいつも物価高　鑑
　壊れたままでぐらぐらの塀　有
クリスマス病の者に幸あれと　肇
　温石腹に屋台引く月　織
渡し舟自転車乗せて帰る家　惠
　かそけき風の寄せる川端　鑑
留学生旅立つ前に花を訪ふ　有
　山窩の長が雉笛を吹く　肇
ナオ　春帽を飛ばして駆ける砂の丘　織
　埴輪の口の語る言の葉　惠
安全の文字に女王でんと坐し　鑑
　我が家の犬もエリザベスして　有
おねだりもジゴロ稼業の技の内　肇
　爪紅の指立てる広い背　織
なまはげの接待の酒ぐびぐびと　惠
　詐欺の防止に巡る家々　鑑
古希すぎてロックンロールにはまりたる　有
　ＳＮＳにいいね何度も　織
陰宗に勝敗を問ふ鎧武者　肇
　南京かぼちや大鍋で炊く　惠
ナウ　かえるさの見上げる先に渡る雁　鑑
　ゴーンと鳴つた本堂の鐘　有
棟梁が道具をしまふｉｔ車　肇
　小さい時の夢をかなへる　織
サッカーのゴール決まつて花も舞ふ　鑑
　ケンケンパーと野遊びの影　惠

連衆　佐々木有子　宇田川肇　平林香織
　渡辺惠子

令和六年七月二十八日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

滴りの座

歌仙「坂の町なり」　奥野美友紀　捌

東京は坂の町なり蝉時雨　美友紀
開襟シャツの先生の背ナ　荷夕
試合前柔道選手礼なして　ひろみ
駐輪場に並ぶ自転車　正夫
猫の眼が光る月夜のものの陰　了斎
紫蘇の実噛めば香りさはやか　み
ウ いつの間に囲炉裏の欲しい頃となり　斎
技の伝授の難き昨今　み
臨書せし平安古筆表装に　夫
十六歳で母となる姫　紀
君と僕ロックンロールとロリポップ　夕
バイク連ねて富士の裾野へ　夫
手を伸ばすきりりと小さき月寒し　み
長い梯子を揺らす木枯　斎
行きつけの飲み屋の女将すぐ説教　み
新幹線にやつと飛び乗る　夫
花の下ラプサンスーチョンてふ紅茶　夕
暮れなほ遅きシベリアの涯　斎
ナオ 雲の如大発生の鰊来る　同
先行販売みごと当選　紀
何事も南無阿弥陀仏唱へつつ　斎
淡青色の美しき壺　夕
ほの白き容浮かぶ朝まだき　み
肩にもたれて居眠りのふり　夫
邪魔になる女はすべて火炙りに　斎
ストラップには小人七人　み
ワイン手に乾杯乾杯巴里祭　夫
年を取つても病気知らずで　紀
月今宵尺八の音の流れくる　夫
夜業いまだに続く門前　斎
ナウ 秋園の築地の崩れ修繕し　夕
四ヵ国語のトイレ案内　夕
ハリウッドショービジネスの成功譚　み
生生流転止むことのなし　斎
同窓の記念に植ゑる花一本　紀
胸像越えてシャボン玉飛ぶ　夫

連衆　西田荷夕　江津ひろみ　國司正夫
鈴木了斎

泉の座

歌仙「炎天や」　武井雅子　捌

炎天や母と眺めし清洲橋　雅子
通ひ慣れたる片陰の道　遊眠
ブレンドをカフェの主は自慢気に　忠史
コミック雑誌テーブルの隅　敦子
稜線を染めて茜の月上り　美智子
松茸飯の準備万端　雅
ウ ママ友とハローウィーンの衣装買ふ　眠
素顔の彼が私好きなの　史
うひうひし今は昔の通ひ婚　敦
襲名披露深く礼して　智
次世代にバトンを渡す大統領　雅
ＡＩの稿直すＡＩ　眠
月の路地年末賞与懐に　史
アフターファイブせめて河豚鍋　敦
警策は篤き老師の思ひやり　智
過疎の村にも外つ国の人　雅
花吹雪猫の駅長三代目　眠
黒い城郭初虹に映え　史
ナオ きしやご遊びデイサービスにとり入れて　敦
エンジン快調ナナハンを駆り　智
身のほどはしかとわかつてゐるつもり　雅
品評会でとつた大賞　眠
階段に忘れた靴は誰の物　史
モンロー気取りまとふ香水　敦
抱きあつて祭の渦に紛れ込み　智
恋の末路はいつも哀しく　雅
喜劇王世の理不尽を笑ひにて　眠
ルーペで覗く新札の柄　史
良夜には酒や団子を供へたり　敦
温泉街にうり坊の出る　智
ナウ 油絵の構想を練る秋の宿　雅
彩とりどりに夢のふくらむ　眠
ホームランけふはどこまで飛ぶのやら　史
エッフェル塔に響く歌声　敦
同窓会花の都を逍遥し　雅
帽子にとまる小さき蝶々　智

連衆　内田遊眠　根津忠史　武井敦子
聖成美智子

第百六十八回例会
猫蓑会総会作品　歌仙五巻　5

滝の座

歌仙「宇宙船」　　田中秀夫　捌

蝉時雨着陸するぞ宇宙船　秀夫
猛暑の襲ふ山河人間　孝子
くづし字のお軸の墨は階調に　純子
廊下走る子叱る声して　徹心
庭先で隣近所の月の宴　霞
ウ
地産地消の栗で炊く飯　孝
転勤の辞令で飛んだ巴里の秋　同
さびしがり屋が群れる盛り場　心
すれ違ふあの横顔の後を追ひ　霞
どんな姫にもなれる君なら　純
冬眠の蛇は見るらん愛の夢　孝
鎮火の鐘に暮れていく月　心
旧約の聖書一節つぶやける　純
早寝早起き酒は適量　孝
ぷつくらと笑顔太眉我が家系　霞
仙台平で奉納の舞　同
花の雲少女は今や売れつ奴で　孝
恋も釣ります春の大川　同
ナオ
上り簗鮎の命のひるがへり　霞
トランペットで式が開幕　純
敵陣へ放つ刺客の香車成る　心
我を待たせるつまらない奴　孝
自販機が新札ぷいと吐き出して　心
賢く動く麻薬犬なり　孝
アロハシャツ的屋の旅は気紛れに　同
肌のほてりに瓜の冷たき　霞
AIが手練手管の指南役　純
直木賞より本屋大賞　霞
ぎざぎざのスカイラインに望の月　純
ブレークダンス流星を蹴る　孝
ナウ
新蕎麦をすすり上手の異国人　純
請うて戴く警策の音　心
年古りて大黒柱黒光り　霞
老舗女将の三指の礼　心
花時にゆるりと歩く小倉山　夫
朝日入り日に伸びる芳草　心

連衆　坂本孝子　近藤純子　佐藤徹心
高塚　霞

猫蓑会総会　於・芭蕉記念館

第百六十九回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌正式俳諧

令和七年芭蕉忌俳諧連歌二十韻

百歳の気色を庭の落葉かな　翁
笠傾けてふせぐ凩　転石
広告塔急ぎ振り向く人もなし　孝子
テイクアウトのホットコーヒー　雅子
ウ
いとし子のほほを照らして月うたふ　淳子
いつか願の糸縒らせばや　秀夫
香ゆかし先の帝の捨扇　葵
明日は何処へ飛んで行かうか　遊眠
草原に馬と羊とホーミーと　あき子
谷に広がる雪解の水　霞
ナオ
高山の祭屋台を追ひ続け　了斎
春月仰ぐ弁柄の窓　洋子
根付ひとつ抽斗奥に眠りたる　純子
恋文の束紐が切れかけ　魚彦
アルバムの元カレ指で撫でてみる　忠史
てんとむしの星くちづけの数　有子
ナウ
天井の鳳凰が見て見ないふり　香織
畳のへりの塵を踏みつつ　をんみ
叱られた日も懐かしく花の頃　千惠子
朧の島へ消えてゆく舟　執筆

芭蕉忌正式俳諧
令和六年秋　配役

宗　匠　鈴木千惠子
脇宗匠　林　転石
副宗匠　武井　雅子
執　筆　三木　俊子
知　司　内田　遊眠
座　見　田中　秀夫
座　配　石川　葵
花　司　野口　明子
香　元　平林　香織
配　硯　近藤　純子
同　福澤をんみ

所作指導　武井　雅子
奏　楽　佐々木有子
写真撮影　田中　秀夫

床の間の「俳席の掟三か条」と
明雅先生写真
一　諸礼停止
一　出合遠近／但声先
一　一句一直／雪月華一句

花司による献花

正式俳諧興行後のお役一同の記念撮影

幸水の座

源心「渡し舟」　大島洋子　捌

しぐるるや旅人運ぶ渡し舟　洋子
ひそと木陰で休む雪虫　千惠子
竹筒にしなやかな蔓絡ませて　徹心
甘えつぱなし家の長男　端雀

懐紙を綴じる水引をしごく執筆
文台捌きの最大の見せ場

宗匠・脇宗匠が見守る中、執筆が左沢文台を運び着座
懐紙と水引の上の文鎮は明雅先生コレクションの刀の鍔

ウ
箒星消えてみんなの十三夜　鄭和
畑の向う鳴子聞こえる　俊子
茸煮る魔女の工房惚れ薬　雀
閨に籠るはアマテラス様　和
鍾乳洞ここぞとばかり手をつなぎ　雀
元祖本家で老舗もめたる　千
塩分の摂り過ぎなども懸案に　和
オーバーオール着れば万能　心
花の門くぐり青春今いちど　俊
映画看板のどらかに描く　千

ナオ
遍路宿当たり外れは運次第　洋
オセロゲームの一気逆転　雀
はつけよいハリストランプ四つに組む　俊
竈の猫は知らぬ存ぜぬ　千
年の湯に恋の噂の次々と　俊
八代亜紀似の豊満な女　心
黒ぢよかは遠火とろ火に気を込める　同
ゆらゆら揺れる我と金魚と　雀
眠れない小児病棟夏の霜　千
ふなっしー君未だ現役　和

ナウ
袖の下取るほど悪い奴もなし　俊
江戸の記憶の積もる町行き　千
鼓笛隊音を残して花ふぶく　心
東風吹き渡るなだらかな丘　和

連衆　鈴木千惠子　佐藤徹心　大武端雀
髙山鄭和　三木俊子

第百六十九回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 源心六巻　1

第百六十九回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 源心六巻 2～6

豊水の座

源心「心こめ」 棚町未悠 捌

世の中はどうあれ時雨忌心こめ　未悠
たわわに実る庭の橙　肇
磯料理庖丁捌き見事にて　雅子
家族で囲む手びねりの皿　霞
ウ 月煌々アトラス彗星尾の長く　荷夕
踊る彼女に恋のときめき　陽一郎
木の実降る鎮守の杜で授かる子　肇
体重ばかりどんどんと増え　雅
旅行社の円高待ちの計画書　夕
寅さんひとり風に吹かれて　霞
夢を喰ひ夢に喰はれる画学生　肇
屋根裏部屋で啜るコーヒー　雅
雑巾がけする板の間の窓に花　陽
鉄鉢の底とける淡雪　肇
ナオ 弥生山挂甲埴輪出土して　雅
大の字になり欠伸する昼　霞
リモートで社長訓辞を聞かされる　肇
地主の裔は受け子稼業に　夕
冬の蚊に鼻の頭をふと刺され　陽
胸底深く届く流し目　霞
ありがちな銀座の街の赤い罠　肇
ビルの間に短夜の月　陽
運命の車輪を回す野外劇　肇

槌打つ音の遠くきこえて　霞
ナウ 満塁にホームラン出てなほ同点　陽
祝の日にはシャンパンを抜き　肇
人集ふ五島列島花盛り　悠
漢方薬を試すうららか　雅

連衆　宇田川肇　武井雅子　高塚　霞
西田荷夕　秋山陽一郎

二十世紀の座

源心「木の葉時雨」 根津忠史 捌

千住へと上り行く舟翁の忌　忠史
木の葉時雨に先をせかされ　葵
実験室ビーカー見つめ息とめて　ひろみ
マスター自慢ブレンドの妙　秀夫
ウ 後の月廻り道して帰らうか　敦子
今鳴いたのがきつと蓑虫　史
子らのため衣打つ母肩細く　葵
隠れてキッスうぶなあの頃　み
パスワード未だあいつの誕生日　夫
おれおれ詐欺の電話頻繁　敦
切れ長の埴輪の眼どこみてる　史
八方鎮める竜描く絵師　葵
爛漫の花よ馬御す騎士たちに　み
直線道路追へる逃水　夫
ナオ お蔭参り町内揃つて夢の旅　敦
怖いものにはお茶と饅頭　史
カルシュームヒアルロン酸関節に　葵
近い将来ロボットの恋　み

もしかしてうちの女房雪女　夫
懐手して夫は置物　敦
誰も彼も総理候補に名乗り出る　史
ドミノゲームは姿勢正して　葵
噴水の高く吹あげ濡らす月　夫
慰霊の寺にお供への瓜　み
ナウ 憧れはザルツブルグでタクト振る　敦
特別セールビルひと回り　史
花桶に花の一枝咲き初めて　葵
鳥の巣箱をのぞく放課後　み

連衆　石川　葵　江津ひろみ　田中秀夫
武井敦子

長十郎の座

源心「宝函」 永田吉文 捌

芭蕉忌や夢は記憶の宝函　吉文
眼閉ぢれば眠る山々　孝子
長靴が倒れて猫の遊び場に　あき子
新聞配るバイク遠のく　健
ウ 有明の月ばかり描く日本画家　をんみ
味はすつきり今年酒酌み　孝
公園に彼女と二人虫を聞き　文
料理上手でくどき上手で　あ
鼻唄でちんとんしやんと律にのり　健
大金納め選挙必勝　み
五輪でのメダル押入れ闇の中　文
天使のやうな幼子の瞳は　孝
魔術師の消した親指花の下　あ

痒さ残してどこへ春の蚊　健
ナオ 淡雪の融けて飛び立つ滑走路　み
国境を越え救助隊ゆく　文
み仏の慈悲にも縋り抗癌剤　孝
好みの珈琲ガトーショコラを　あ
覗く窓ルージュの唇の謎めきて　健
男殺しの姐さんの閨　孝
物の怪は恋の恨みを果たさんと　文
薪能なり乱拍子打つ　孝
見上げれば涼み舟よりビルの月　健
自治会長の太き二の腕　あ
ナウ 塵ひとつ残さないほど綺麗好き　み
鉄道は皆定時運行　文
花降らす天守の鯱の勢ひか　孝
ラケットを振るうららかな午後　あ

連衆　坂本孝子　岩崎あき子　由井　健
福澤をんみ

あきづきの座

源心「宙を彩る」　近藤純子　捌

野草もて宙を彩る翁の忌　純子
大海原を渡り来る鶴　正夫
それぞれが持ち寄る肴雅趣ありて　遊眠
子らは早くも遊び始める　有子
ウ まん丸の月覗きをり路地の裏　転石
気になるあの娘蘭のブローチ　万迷
手をつなぎ時代祭へ初デート　有
姫君よりもわたしいけてる　眠

新幹線恐竜並ぶ駅に立つ　純
ジグソーパズル額装の壁　眠
被団協つひにノーベル平和賞　正
白髪揺らして先頭を行く　石
哀しみも喜びも知る山の花　有
信濃の川に溶ける淡雪　迷
ナオ 若鮎にかける蓼酢の二、三滴　眠
祖父の掛軸こつそりと売り　有
贋作も多く出回るバンクシー　石
倫敦塔は寒靄の中　正
誕生日話題の品と友が来て　迷
二股の恋バレた女子会　同
抜けられぬお前は俺の麻薬なり　有
小林旭いまも現役　正
月涼し高層街の更けゆけば　眠
こんなところに薄翅蜉蝣　有
ナウ 神主は袴姿で掃き清め　正
君が代歌ふ声が聞こえる　石
優勝のパレード花に包まれて　純
庭を眺むるうららかな午後　迷

連衆　國司正夫　内田遊眠　佐々木有子
林　転石　吉澤万迷

新高の座

源心「伊賀焼の」　小原濤声　捌

時雨忌や伊賀焼の肌さびたまま　濤声
口切茶事の滾る湯の音　明子
飛行船見下ろす町の小さくて　香織

モノクロパズル拾ふ一片　桜千子
ウ 待ちに待つ夕餉の窓に後の月　鑑
夜寒の寝息に萌える枕辺　香里
秋の蚊帳薄く浮きたる君の影　明
古典の本を漁るフリマで　声
こだはりのジタンカポラル燻らせる　桜
波濤渦巻く岩窟の島　織
若者に聖地巡りが大流行り　里
解散選挙金が争点　鑑
山に飛花もののあはれを知る頃に　声
おたまじやくしに後ろ足出た　明
ナオ 名画座で教授見かける春の昼　織
失語症なる王の憂鬱　桜
週末は餌場求めるゴルフ女子　鑑
関係ないさ歳の違ひは　里
糟糠の妻の留袖惚れなほし　明
角の蕎麦屋に長い行列　声
宿題は微分積分五十問　桜
タイの菩薩は象に座しをり　織
夏の月水面に浮かぶ葉を照らし　里
同窓会に巡る冷酒　鑑
ナウ 爺ちやんは都内の道を知りつくす　声
勇の墓の板橋に降り　明
石垣にそつと寄り添ふ花の枝　織
雀隠れに幼な児の靴　桜

連衆　野口明子　平林香織　鵜飼桜千子
荒木　鑑　式田香里

令和六年十月十六日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

第39回国民文化祭「清流の国ぎふ」文化祭2024 連句の祭典会員の入賞作品 二巻

岐阜市長賞

短歌行「檸檬食む」　石川　葵　捌

まつすぐな瞳の少女檸檬食む　葵
　芝に憩へば淡き昼月　くに子
秋の海文字は醸され詩となりて　由紀子
　異国の習ひ受け継ぎし民　葵
ウ　裏通り独りが似合ふショットバー　く
　革のコートの秘密警察　由
色に惑ひなるやうになる近松忌　葵
　年を重ねて艶を増す媚び　く
ブルースのシュビデュビデュビワシュビデュビワ　由
　人種の坩堝沸点を越ゆ　葵
母恋し父も恋しと花に触れ　由
　瞽女の脚絆に仔猫擦り寄る　く
ナオ　釣堀の糸のどろかな昼下り　葵
　ミステリーでは死体おしやべり　由
こつそりと録音機能ＯＮにして　く
　崩さぬやうに掬ふプディング　葵
突然の男時の愛は無鉄砲　由
　嫁においでと叫ぶバンジー　く
三伏の月を頂く神の峰　葵
　祭提灯連なりて行く　由
ナウ　飛車落ちの孫との勝負引き分けて　く
　ぐるぐる回す肩の関節　葵
花吹雪官庁街を埋め尽くし　く
日がな一日亀の看経　由

連衆　中田くに子　馬場由紀子

令和五年十月十日起首
令和五年十一月十一日　満尾　文音

岐阜市議会議長賞

短歌行「陽を弾く」　高塚　霞　捌

初暦北斎の富士陽を弾く　霞
　福寿草咲く丹精の鉢　ひろみ
抜け道を少年団は一列に　葵
　揃ひのシューズ軽き足取り　霞
ウ　喝采の野外演奏月の下　み
　蛇の仕掛ける恋にゆらゆら　葵
紅き唇白き肢体に魅せられて　霞
　執事寡黙に見ざる聞かざる　み
求人の検索エンジン再起動　葵
　大海原へ小舟出てゆく　霞
水軍の裔綿々と花の島　み
　神饌となす苗代を掻き　葵
ナオ　朝食に青饅の鉢勧められ　霞
　気分変へるも作家呻吟　み
知恵の輪の上級コース難しく　葵
　おでこごつんとぶつかつてキス　霞
人生を狂はされても君が好き　み
　ＡＩでさへ誤解錯覚　霞
月皓々ナスカの鳥は羽広げ　葵
　友との電話はづむ長き夜　み
ナウ　今年酒杜氏好みに仕上がりて　葵
　基本忘れず掃除片付け　み
花の雲五重塔を抱くらん　霞
　牛の長鳴き土匂ふ頃　葵

連衆　江津ひろみ　石川　葵

令和六年　一月　七　日　起首
令和六年　三月　四　日　満尾　文音

（※P.3下段から続く）

裏に「人の無事／聞はしなれや／朝かすみ／蒼虬（印）」とある。「はし」は、千恵子さんや平林香織さんにもお尋ねして「橋」かと落ち着いた。蒼虬生前の編『対塔庵蒼虬句集』（梅室序、天保十年門人校合、天保十五年刊）に「人の無事きくはしなれや朝霞」。また『蒼虬翁句集』（訂正蒼虬翁句集、弘化四年刊。『対塔庵蒼虬句集』の増補改訂版）に、「朝かすみ棹の雫ののろかりぬ／人の無事聞はしなれや朝霞／小橋まで出行て来たり朝かすみ／沙汰なしに汐は満たり春の雨」と、朝霞や春の水辺を詠んだ句が並ぶ。

ここまで書いて、大西さんは大様に「なぁんでもいいですよ」と、二村さんは、「僕がとりついだんですよ」と自慢げにおっしゃるような気がする。

猫蓑庵二世千恵子宗匠、おめでとうございます。

【留書】連句徒然

石川葵

俳句、短歌の経験のない私が、偶然連句と出会ってから、二十年が過ぎようとしています。最近はなるべく肩に力を入れないで句を付けたいと考えていますが、なかなかこれが難しい。軽みにはまだまだのようです。連句を始めて暫くして、偶然、非懐紙に出会いました。とても斬新で魅力的、その時から非懐紙をもっと知りたいと思い、私の連句の大切な師のひとりである、矢崎藍先生にご相談をいたしました。その折、参考にと藍先生のお書きになった、渋谷道氏との非懐紙のエッセイを見せていただきました。

見知らぬ男逆光に立つ　藍
抱かれつつはてなき砂漠肩ごしに　道
スチールデスクすべすべと冷え　藍

強烈な三句、そして、エッセイでした。その時から、非懐紙が熾火のように私の中に居座るようになりました。「鷺草」から「三千風の旅」を経て、狩野康子氏に辿り着き、そのご指導を受けての三吟は、わくわくの連続、今までに経験していない時を過ごしました。

前置きが長くなりましたが、康子さんから新しい方々との非懐紙を勧められ、今回の受賞作「檸檬食む」の連衆の馬場由紀子さん、中田くに子さんは、私の仕掛けた「ゴキブリホイホイ」ならぬ「非懐紙ホイホイ」に見事に掛かってくださった、素敵なお仲間です。

この作品は、非懐紙の蓮の糸ほどの付けに、脳細胞が些か疲れを覚えたタイミングの時にリハビリも兼ねて巻いたものです。

女学生のナイフのような潔癖さ（今ではあまりお目にかかれませんが）を発句に、きちんとした句を得意とするくに子さんが、脇をぴたりと決めてくださいました。第三は、由紀子さんの詩的な、第三ではあまりお目にかかれない句。お決まり事から些か逸れた、でも私達らしい表四句となりました。その後の句も各々の個性たっぷりの一巻となりました。

連句は個性と個性のぶつかり合い。そのぶつかり合いが、絶妙な句の距離感を生み、わくわく感を生み出します。以前私は連句を大海原への航海に例えました。今もその想いは変わっていません。潮の流れを読み、風の声を聞き、月や星と語らいつつ満尾へと進む航海の、恙ない時も、危うい時もすべてが連句なのだと、その面白さを楽しみたいと、心より思っています。真剣に遊ぶ事の面白さ、連句との偶然の出会いは、子育てを終えた後の、棚から美味しいぼた餅が落ちてきたような出来事でした。藍先生はもちろん、孝子宗匠との出会い、狩野康子さんとの出会い、猫蓑の方々との出会い、幸せな出会いは宝物です。

この頃は、あまり細かいことにとらわれず、ただ、付けを楽しみ、一巻の流れを楽しむ、伸びやかな連句を巻いていけたらと考えています。今まで出会ってきた方々、これから出会うであろう方々、よろしくお願いいたします。

授賞式後の石川葵・高塚霞両氏
岐阜じゅうろくプラザにて

※事務局だより【付記】

立机文集『紅梅一枝』に誤記がありました。お詫びして訂正します。

P.8伊勢派系統図〈誤〉芦杖→〈正〉芦丈

事務局だより

●既往の行事

・令和六年七月二十八日（日）第百六十八回例会（猫蓑会総会）を開催。歌仙興行。当日作品は4～6ページに掲載。

・令和六年十月十六日（水）、江東区芭蕉記念館にて第百六十九回例会（芭蕉忌・明雅忌）を開催。正式俳諧興行の後、源心興行。当日作品は7～9ページに掲載。

・令和七年一月二十六日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第百七十回例会（初懐紙・猫蓑庵二世文台披露）を開催。二十韻興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

・令和七年四月下旬に、亀戸天神社にて、第百七十一回例会（藤祭例会）を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行（一般公開）後、二十韻興行。

・六月二十二日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、同人会総会を開催予定。歌仙興行。

●猫蓑会リモート連句会

・第二十四回・第二十五回を十二月十四日(土)・二月十一日（火）に開催。作品を猫蓑会ＨＰに掲載。

・第二十六回を四月十六日（土）に開催予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

・髙山鄭和様　令和六年十一月　三万円
・匿名　令和六年十一月　三万円
・鈴木千惠子様　令和七年一月　十万円
・基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●新入会員

・吉澤万迷　（石川県）令和六年十月入会
・坂　廣子　（神奈川県）令和七年一月入会
・五郎丸照子　（鹿児島県）令和七年一月入会
・本多遊子　（東京都）令和七年一月入会

●猫蓑作品集　作品募集

・令和七年九月頃を目処に、猫蓑作品集第二十七号を刊行します。猫蓑会員は各自捌いた作品を一人につき一巻掲載することができます。以下は、本誌とともにお送りしました募集要項と同じ内容です。

◎募集要項

締切　令和七年四月三十日

◎応募方法

・本誌同封の専用用紙に手書きしたものを郵送または、各自Wordで作成したものをメールに添付する。

・郵送先：〒110・0012
台東区竜泉三丁目12・7・903
平林　香織

・メール送付先：khira884@gmail.com

◎留意点

・出稿料二千円（作品集一冊代金込み）を以下の振込口座に振込んでください。応募の際、振込んだ日をお知らせください。
振込先　郵貯銀行
口座番号　00140・4・791856
加入者名　猫蓑会

・形式自由　一人一巻（歌仙までの長さ）。ただし、独吟・賦し物は不可

・令和五年二月以降の猫蓑会員捌き作品

・作品の書式は作品集二十六号を参照し、同様にしてください。自他場、季、句番号などは記入しないでください。

・新かな、旧かなの別を明記してください。

・応募に際しては、猫蓑会ホーム―ページ掲載の「猫蓑会式目」を参照の上、あらかじめ十分な校合をされるようお願いします。

（※P.11に【付記】あり）

定期刊行　『猫蓑通信』第百二十六号
令和七年二月十五日発行
発行人　猫蓑会　鈴木千惠子
事務局　佐々木有子
〒161・0033
東京都新宿区下落合4・9・34・313
編集人　平林香織
編集委員　岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千惠子・武井雅子・田中秀夫
（五十音順）
印刷所　関東図書株式会社